

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書

平成 30 年 11 月 13 日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 医学研究科 肝胆膵・移植外科

職 名・学 年 博士課程4年

氏 名 楊 知明

助成の種類	平成 29 年度 ・ 国際研究集会発表助成		
研究集会名	第52回ヨーロッパ外科学会学術集会 52nd Congress of the European Society for Surgical Research		
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他( )		
発表題目	肝細胞癌切除後の長期成績:初回治癒切除と再発後切除は予後に寄与する		
開催場所	オランダ共和国 アムステルダム		
渡航期間	平成 29 年 6 月 14 日 ~ 平成 29 年 6 月 17 日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )		
会計報告	交付を受けた助成金額	300,000円	
	使用した助成金額	300,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	航空券(一部)	140,000円
		学会参加費(一部)	80,000円
		滞在費(一部)	70,000円
その他、現地交通費など		10,000円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 貴財団のご厚意により、国際学会発表を通じて学術的な研鑽を積む機会を得ることができました。誠にありがとうございました。		

【学術集会】

集会等の名称

(和文) 第53回 ヨーロッパ外科研究学会総会

(英文) 53 Congress of the European Society for Surgical Reserch

【開催期間】

平成29年6月14日 ~平成29年6月17日

【開催地】

オランダ共和国 アムステルダム

【発表演題】

和文) 肝細胞癌切除後の長期成績：初回治癒切除と再発後切除は予後に寄与する

(英文) Long term outcomes of hepatocellular carcinoma after liver resection: significance of radical resection for primary tumor and subsequent surgical treatments for recurrences

【学会の概要】

ESSRはヨーロッパを中心として、日本を含むアジアからの参加者も多い外科研究の学会である。臨床研究のみならず、基礎研究に関する報告も数多く、新たな知見を得ることができる。招待講演および口頭発表は、会場内3部屋で行われた。また、ポスターは設置された大型モニターで随時確認することが出来た。このように非常にコンパクトな会場かつ、回りやすいプログラムが計画されていたので、私の発表・研究テーマと類似した発表や教育講演も拝聴することが出来、有意義な時間を過ごすことができた。

【発表の概要】

私は、6月17日、「Pararell Session : Liver」にて、「肝細胞癌の切除後予後は初回治癒切除と再発後切除の有無に関連する」旨の主旨の口演発表を行った。

肝細胞癌は5年再発率が80%と根治治療である外科切除が可能であったとしても再発はほぼ必発

であるため、長期生存を得るには初回手術だけでなく、再発後治療も重要な位置を占める。肝内再発が再発のおよそ70-80%を占めるため、治療は肝内再発に焦点が当てられてきた。しかしながら、その他の再発形式に関しては未だ不明な点が多く、有効な治療方法も確立されていない。我々は肝内再発だけでなく、肝外転移に関しても治癒切除が可能、あるいは肝内病変の病勢コントロールがなされていれば積極的に外科治療を行なってきた。本研究は過去の報告と比して最大の症例数(n=979)で、切除可能であれば、再発形式に関係なく外科治療の有無が長期成績に関与していることを示したものである。我々はこれまでに、再発肝細胞癌について、生体肝移植が長期生存が得られることを示してきたが (Kaido et al. Surgery. 2013)、わが国特有の社会的事情もあり、決してその適応は一般的ではない。本研究の結果は、社会的に移植医療が困難な症例であっても、肝細胞癌の治療戦略に貢献すると考えられる。

また、質疑応答では切除の明確な適応の有無を問われたが、実際明確な基準をこの種の治療に求めることは難しい。よって、基準は肉眼的治癒切除を満たすもの、あるいは肝内病変がコントロールされている切除可能転移巣のみと述べる留めた。

【謝辞】 公益財団法人京都大学教育研究振興財団に助成いただいたことで、今回の国際会議に参加し発表する機会を得ることができました。前向き試験が実施困難である臨床研究をどのように海外へ発信するか、海外の研究者との情報交換を行うことで、現在取り組んでいる研究のさらなる進展につながると考えます。採択いただきましたことに、心より感謝申し上げます。